2023年度かべ新聞コンクール中学校の部講評

十勝中学校文化連盟新聞専門部部長
審査委員長　　福　留　克　志

この春から新型コロナウイルス感染症が５類に移行し、通常の生活が戻ってきました。長かったコロナ禍から解放され、学校の諸活動もいつものことがいつものようにできるようになってきた感があります。学校での活動が制限されている間、生徒同士が密になる活動や外を訪問するような活動の自粛を余儀なくされてきました。新聞づくりの活動もその影響を受け、活動を控える状況が続きましたが、今年度から少しずつ活動を再開する動きもみられます。

今年度の「かべ新聞コンクール中学校の部」は、数年ぶりに芽室西中学校から２作品の出品があり、新聞づくりにがんばる生徒のみなさんの意欲を感じ、うれしい限りです。コンクール参加にあたり、ご指導頂いた先生方をはじめ、お力添えを頂いた全てのみなさんに心より感謝申し上げます。

新聞づくりは、記事の題材を考えて、その内容を文章にするために取材したり、調べたりすることにより、読み手に伝える活動です。これは同時に、身につけた知識・技能を総合的に発揮する活動であり、自分自身を見つめなおしたり、友だちと協力することの大切さをも学ぶことができる活動です。ただ、このような有意義な活動も最近では時間的な制約が厳しく、限られた時間の中でいかに仕上げるかの苦労も多いものと思います。

さて、審査は例年同様、「内容・企画力」と「編集技術」の大きく２つの観点でそれぞれの学年の発達段階に合わせて行っています。今年度の１年生２作品も、さまざまな題材を選び、しっかりと取材を加えて記事にしたものが多くありました。読みやすいレイアウトの工夫をしたり、カラーを上手に使ったり、きれいですっきりとまとまった作品となっています。また、イラストや写真を効果的に取り入れて華やかで楽しく読める雰囲気を出したり、グラフや表を活用して視覚的・直感的に読ませる工夫も見られました。また、感心したのは、よく考えられた記事の内容です。決して背伸びをせず、中学１年生としての見方でしっかりと題材を考え、わかりやすい文章にまとめたのはすばらしく、本当によく努力したと思います。

一方で、見出しがタイトルのようになっている記事もあったのは残念でした。内容を想像させるような動きのある言葉を選んでつけていくともっと生き生きとしてくるはずです。また、レイアウトはオーソドックスで申し分ないのですが、記事の重要性や内容によっての効果的な配置があると思います。いろいろな新聞を見て工夫していけるとなおよくなることと思います。さらに、取材を省略し、自分たちの思いや調べたことだけで記事の内容を構成したものがありました。「生きた新聞」にするためには取材は欠かせません。その関係者の声を載せる、あるいはインタビューのひとことを入れるなど、もう一工夫あると臨場感のある雰囲気が伝わる記事になると考えます。

かべ新聞づくりは、それぞれの友だちが持っているさまざまな知識や知恵、そして今までの経験や技能を紙面に集め、みんなで協力して作るところに大きな楽しみと喜びがあります。これからもその感動を、でき上がったときのうれしさを味わってほしいと思います。今後のみなさんのより一層の頑張りを大いに期待しています。